

# 『田舎者』の自己樹立(一)

— 大分県における近代化と文学の問題を考える —

古 庄 ゆ き 子

一  
標題「田舎者」の自己樹立」は、中野重治が「齋藤茂吉ノ  
ト」の中で使っているものである。

そのもととは、昭和十年代、保田与重郎の影響をうけた、幻想的、空想的作風の歌人で『日本歌人』の主宰者でもあった前川佐美雄の発言から出ている。

前川は『文庫』昭和十六年八月号に「わが愛唱歌」を書いたが、その中で与謝野晶子の

ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして経読ます寺を激賞、一方アララギ派を中心とする写生派を批難し、次のようにのべた。

ところで今日の歌壇はかういう歌(与謝野の歌—筆者)を余り歓迎しない。寧ろ不可なものとして排斥してゐる。これは誤った写生説などが歌壇を風靡するやうになつてからだが、言ふまでもなく写生などの中からのいい歌は生まれて

来る筈はないのである。あれは文化の伝統を持たない田舎者が、一生懸命自分を叩きあげてゐるだけの図であつて、国民としての志も、また何の信仰も持たないものの糞努力に過ぎない。

中野はこの前川の「文化を持たない田舎者」、「一生懸命自分を叩きあげ」、「糞努力」等の評言を「ある程度写生の説にあつた」とした上で、子規によつて提唱された視覚的「写生」が、単に短歌だけの領域の問題でなく、「明治の日本国民が、世界史に新しい姿・新しい力として登場してくる必要であつたもの、このものの獲得という国民的要請にかかわつていたもの」と位置づけるとともに、これが明治期の、「田舎者」の自己樹立」にかかわる問題でもあつたとして、前川の批難する「文化の伝統を持たない田舎者」が「一生懸命自己を叩きあげ」ている「糞努力」を積極的な力として評価したのである。前川が嘲笑した「文化を持たない田舎者」

を中野は

日本文化の文化としての力量は、こういう田舎者に自己を叩き上げさせるだけのものをその背景として持っていたのであり、日本の「文化の伝統」ということは、そういう意味においてこそ考えられねばならなかつた。(後略)と、文化の伝統をダイナミックに、より深く、広いところで考へるべきことを提起した。

以上の論を前置きとして、中野のいう『田舎者』の自己樹立<sup>立</sup>が、明治以後の大分県下でどのような人々によつて、どのような形で行われたかを考へてみたい。

## 二

大分県はながく、もつともきびしい実業・実学の風土であつた。昭和三十年代半ば以後の高度経済成長期にいたるまで農林業・漁業等、第一次産業を主としていた。したがつて日常生活に直接役に立たぬ文学を生み出したり、受け入れたりする、いわゆる文学的階層がきわめて薄かつたのは、むしろ当然であつた。「詩を作るより田を作れ」の考へ方がなく支配的であつた。地主、小作制によつて成り立ち、家族制度に縛られた農村県であることから、近代文学の基となる個の樹立はきわめて困難であつた。とりわけ近代小説からはもつとも遠いところにあつた。有能な人々は法律、経済、科学技術等々の分野に生きるべく、学問をし、その道をたどつた。野上弥生子の如き優れた作家を生んだ土地ではあるが、彼女の

文学的才能の開花は東京においてなされたのであつて故郷大分においてではない。

大分県出身で、明治の代表的思想家福沢諭吉は、『学問のすめ』初編において

学問とは、ただむつかしき字を知り、解き難き古文を読み和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。これらの文学も自ずから人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古来世間の儒者和学者などの申すよう、さまであがめ貴むべきものにあらず、古来漢学者に世帯持の上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧なる町人も稀なり。これがため心ある町人百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理からぬことなり。(注)畢竟その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。とのべ、そのような「実なき学問」は「先ず次に」して、今「専ら勤むべきは人間普通日常に近き実学」でなければならぬと説いた。

福沢のいう「実学」を具体的に掲げると、いろは四七文字、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱ひ方であり、さらに進んでは地理学、究理学(物理学等自然科学)・歴史学、経済学、修身等であつた。これらを「尺間普通の実学」とし、「人たる者貴賤の区別なく皆悉くたしなむべき心得」であるとした。この「心得」の上に立つて「士農工商各々その分を尽し、銘々の家業を営み、身も独立し、天下国家も独立

すべき」だと考えているのである。この福沢の考え方は、明治維新後の新しい時代を創りつつあった指導層に共通するものであったといえよう。そしてまた大分県の(多分日本各地)の風土にもっとも受け入れやすい考え方であった。

こうした考え方がなく支配的であったことにおいて、日本の文学風土は決して豊かであったとは言えない。その中で大分県の文化―文学的特徴は、こうした状態が、極論すれば昭和三十年代の高度成長期まで続いたところにある。日本の文学、そして広く文化は、社会的に支配層、地域的には大都市、とりわけ京都、東京に偏在した。偏在することによって洗練した質のものになったが、それは大分県のような文化的辺境をつくり出し、きりすてた上で成り立つものであった。

### 三

明治、大正、昭和初年代を通して、県下には、漢詩を作る知識人層がいた。大正期ころまでは旧派の和歌の指導者があり、宗匠を中心とする雑俳会もあった。どどいつを作る農民がおり、川柳をたしなむ人々もいた。

この土地に生まれ、生き、そこで新しい文学を創り出そうとする人々は、これらとのかかわり、たたかいを経なければ出発できなかった。漢詩、和歌、雑俳、どどいつ、川柳は新しい文学の担い手が生まれても、衰えることなく、新しい文学と並存して生き続けていたのである。

『ホトトギス』の俳人で、明治末、大正中中期まで県下のホ

トトギス系の俳人たちの指導者であった峯青嵐(大分師範学校長として明治四十年六月から大正九年四月まで在職)は、大正十年の俳句大会において、『風呂屋文学』『床屋文学』だの、陋習を打破して、大分県下の文芸上に於いて一新生面を開きたい」と述べ、鹿島青波(一八九五―一九六五、国見町出身、後の葉山耕三郎)は、大正十三年『西海文学』創刊号において、旧派和歌や俳諧を「通俗文学」とよび、自分たちの「新興文芸」の圧迫がゆるむと、それがすぐに頭をもたげてくると、その根強さを指摘し、これとの対決を促している。

「新興文芸」の苦闘は、「通俗文学」と同じ形式、同じ土俵の中で新しい世界をつくろうとするところから来た。新しい文学の担い手として登場したのは後にのべるような若い青年男女であったが、彼らは近代文学の代表的ジャンルである小説には向わず、大部分が短歌、俳句、詩の形式で自らを表現しようとした。それが彼らのもっとも身近かな表現形式であったのだが、しかし、彼らの内部にはさまざまなジャンルへ向うべき可能性を混沌の中に泌めていたように見える。ただそれが開花できず、そのエネルギーは既存の短歌、俳句を変革することに投入された。ある農民歌人は、おそらく村の暮しの中にあつた作業歌を基としたどどいつから出発して、その抒情を純化し、短歌につくり上げるのに、ほとんどその一生を費やしているのを見ることができるといえる。

県下にはいま一つ、福沢の実業、実学と「文章趣味の啓発」の両立を理想とする人々がいた。

明治四十五年(一九二二)に東山香村(山香町)で創刊された雑誌『趣味』(山香趣味の会刊、編集発行人安部政雄)、大正二年(一九一三)、大分市につくられた芸芸同行会の『趣味』(編集発行人佐藤辰水、雑誌名はのち『新大分』と改称)に結集した人々である。雑誌名そのものが、この人々の立場を示している。

山香の趣味の会の『趣味』は、その目的、本領を「実益知識の振興と田園思想の鼓吹と文章趣味の啓発」に求めた。つまり「半面に実益増進、他面に趣味品性の調和」を理想とした。大分の『趣味』は、やや都市的で、「田園思想の鼓吹」はなく、「高尚優美なる趣味の向上、人格の修養に努め、人情の融和統一を図るに努力する」を目的とした。山香の『趣味』が農業・農村問題を中心とする論説、実用、実益の記事、芸の三分野の欄を設けているのは、この雑誌の実業、実益と文学とを折衷させようという姿勢を示すものである。

文学の問題としていえば、この二つの『趣味』は新旧歌人、俳人の共存、新旧ジャンルの重層、共存の場であった。大分県短歌革新の先駆者の一人といわれる平島与志美が双方の『趣味』に作品を発表し、一方、山香の『趣味』では旧派和歌の中野泰行が選者となり、大分では俳句の選者に旧派の俳諧師九世静香一鶴、宗匠上田鷹二がいるという具合である。また、漢詩と自由詩、俚謡、川柳等、新旧ジャンルが共存、混在している。実態は今後さらに明らかにされねばならないが、この二つの『趣味』に、新旧文学の共存する当時の大分県文

芸界の実相が現われているといえよう。以後に創刊された総合文芸誌にもしばしば見られる傾向のようである。(注4)

#### 四

大分県下での文学上の近代は、明治三十年代半ば、筑紫久嶺(一八八一—一九〇四 久住町出身)や平島与志美(？—一九一五 日出町出身)の活躍期にはじまるとされている。与謝野晶子が『みだれ髪』によって自由、大胆に恋愛をうたい上げ、島崎藤村が

逐に、新しき詩歌の時は来りぬ(中略)新しきうたびとの群の多くは、ただ穆ぼ実な青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されど偽りもなかりき。(注5)とうたいあげた時代である。

「新しきうたびと」である筑紫も平島も「穆実なる青年」であった。筑紫は県立大分中学、竹田中学中退者であり、平島も県立農学校中退者であるという。彼らを先駆として、それに続く大正、昭和初期にかけての大分県下の新しい文学的階層は、中学校、高等女学校、師範学校、農学校卒業生、中退者を主力として形成されているといつてよい。職業でいえば、家業の農・商業を継ぐもの、新聞記者、教師、鉄道員、印刷工、看護婦、電話交換手等々多様であった。

彼らを新しい文学の担い手としたのは自我の目覚めであった。彼らは家族制度下の「家」、親に反逆し、あえて自我を貫ぬこうとした。

筑紫には

我筆を折りて父君のたまはくこれぞ子の幸われの幸なり  
の歌がある。実業の世界の父には子が筆を折ることが父と子  
のために「幸」と思へた。彼は大分中学三年当時に校長排  
斥のストライキを起したりターゲターの一人として停学処分を  
うけ、それを機に、明治三十二年上京、東京の中学に転校し  
たが、製糸工場経営者の父は、文学をやめねば仕送りを断つ  
と嚇したという。しかし彼は学資をことわつて、東京でも『明  
星』、『新声』などに投稿していたらしい。『中学世界』に短編小  
説が入選したこともあるようである。やがて病を得て帰郷し  
た。この歌はそのころのことかと推測される。

大正はじめ、大阪で服部嘉香の『現代詩文』に参加、のち  
帰郷して小学校教員をしながら、『豊州新報』誌上等で活躍し  
た岩田露草（一八九四—？野津町出身）には

放埒の子と罵られある時は線路に立ちしこともありけり  
がある。また、与謝野晶子風の情熱的歌を作つた女流歌人三  
苦ひさか（一八九六—？久住町出身）には

父母よこの娘は遂に逆きたり二十四年の恩愛をすて  
の歌を見ることができ。江口章子（一八八八—一九四四香  
々地町出身）は、生前故郷に入られなかつた人である。

## 五

新しい歌人たちは宗匠でなく同人誌中心に結集した。その  
ことだけで旧派和歌、俳諧の人々をおびやかす存在であつた。

また伝統的作風によらなかつた。

大正七年四月七日の『大分新聞』「文苑」欄に

歌枕知らぬ県下の歌人が雑誌など出して春深みゆく

美千彦

という歌がみられる。これが旧派和歌の人の、「歌枕も知らぬ」  
新しい歌つくりたちに対する嘆息の歌か、あるいは新しい歌  
人の、伝統的の歌学についての自らの無知を自嘲する歌かわか  
りかねるが、旧派和歌の人からすれば「歌枕も知らぬ」若い  
歌人の同人誌づくりは驚くべきことであつたにちがいない。  
新しい歌人たちは新しい生き方を求めた。それは同時に新  
しい歌を求めることでもあつた。前述の二つの「趣味」が、  
文学を「趣味」として、実業・実益と調和させようとしたの  
に對して、新しい歌人たちはそれを調和させようとしなかつ  
た。むしろその対立の中で、対立をバネとして作歌したとい  
つてよい。

それを自覚的に行つたのは『中津新聞』の記者で、大正四  
年（一九一五）歌誌『ニューライフ』を刊行した秋満湘川（  
一八九〇—？中津市出身）や同じく中津の『二豊新聞』記者  
で生活の歌を提唱した合羅哀愁（中津市出身）である。秋満  
が自らの雑誌を『ニューライフ』と名づけたところに彼の姿  
勢がうかがえる。

秋満は神職の子であつたにもかかわらず新聞記者となつた  
自らの生き方と歌の關係を次のように述べている。

自分は神職の児であるのに何故新聞記者となつたのであら

うか？親は自分を神職になさうと思つて旧式な型にはめて教育もし、又教育もされたのであるのに、何故？新芸術に生きる自分となつたのだらうか？（中略）幼くない時から――今もだが――神職の児は神職らしく、古い書籍を読めばよい、古い歌を作ればよい、旧道徳の範囲から一步も踏み出さぬがよいと、親から云はれた言葉に対して身の毛もよだつように恐ろしい思いがするのである。だがそれは暫しの間だ。そうなつたのは真に自分は自己に生きたのである。個性に生きたのである。そうしなければ自分は精神的に死んでいゝであらう。<sup>（注）</sup>

合羅哀愁は作歌の側面から新しい生活に迫る論を展開している。彼は旧派和歌の人々が、「露ははかなく、命はもろいもの」とあきらめ、末句に「けり」や「かな」をつけねば歌でないと思ひ込んでゐると論難し、さらに次のように自分の立場をのべてゐる。

我等は、其の旧派の人々の様に決して定められた辞句や用語を型の如く尊重して、そして三十一文字と言ふ形式から一步も踏み出さないと言ふ制約や法則に依つて何の感動もないのに歌をこしらえるのではない。我等は本当の人間のいのちを歌うのだ。といふのは有の儘に痛切に、真実に、至純に自己の生活を歌い出すのだ。<sup>（注）</sup>

当時県下には多くの小新聞が発行されていた。その紙面が若い文学の担い手たちに発表の場を与え、育てている。合羅哀愁が記者をしていた『二豊新聞』、秋満湘川が記者をしていた

た『中津新聞』はその光榮をまず担うだろう。彼らは歌人として、県下ではじめての新しい文学集団を作り、同人誌『溪流』を刊行した松田晩歌（一八九三―一九七三 耶馬溪町出身）や、生活、労働をうたつた川原田重治（中津市出身）、県下最初の女流歌人といわれる尾家歌子（一八九六―一九一七 三光村出身）、のち晩歌と結婚、松田歌子となる。ペンネーム紅花等々多彩な才能を引き出した。また平島与志美は『大分日日新聞』の選者として、大分市の新しい文学の担い手を育てた。

#### 注

- 1 中野重治（ノート）短歌写生の説（『斎藤茂吉ノート』）
- 2 『中野重治全集』第九巻収。
- 3 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫
- 4 『大分新聞』大正十年九月二十九日号。
- 5 狭間久『大分県文化百年史』。
- 6 『藤村詩集』自序。
- 7 注4による。
- 8 秋満湘川『ニューライフ』創刊号。
- 9 合羅哀愁『街路』大正五年七月号。

本稿は『大分県史』近代篇Ⅲに書いた「県下の文学状況と在京作家」をもとに、多少書き改めたものである。

大分県における近・現代の文学活動については狭間久『大分県文化百年史』大分合同新聞社 昭和四十四年刊）があり、

短歌を中心とした山住久『大分県歌壇誌』(大分県歌人クラブ昭和五三年刊)がある。本稿もこの二著によるところが大きい。原資料は『葉山耕三郎文庫』蔵によったが、なお不十分である。